SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

新たなキャリア教育観を柱とした学校づくり：「人生100年時代」を見据えて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清澤, 涼介 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024836

新たなキャリア教育観を柱とした学校づくり

――「人生 100 年時代」を見据えて――

清澤　涼介

Developing Schools Focused on Renewed Career Education

: Implications for the 100-Year Life

Ryosuke KIYOSAWA

１　問題の所在

首相官邸による「人生 100 年時代構想会議」中間報告が 2017 年 12 月にまとめられた。国連の推計では、2050 年までに日本の 100 歳以上の人口は 100 万人を突破する見込みである。リンダ・グラットン(2016)は、人間の寿命は驚異的に伸びており、2007 年に日本で生まれた子供の半分は、100 歳以上生きる時代となり、人生 100 年が当たり前になると主張している。人生 100 年が当たり前になると、職業生活に関する考え方も変わらざるを得ない。今でさえ社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、未来は予測が困難な時代である。機械化や人工知能の発達により、変化は加速度を増している。人生が延びれば、経済面を考えても引退時期を今までよりも長めに設定しなければならない。長く働くためには常に新しい知識や能力を獲得するための学習が必要となる。

2016 年 6 月に発表された新学習指導要領解説「改訂の経緯」の冒頭においても「今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代」を迎えており、「雇用の在り方や学校において獲得する知識の意味にも大きな変化をもたらすのではないか」との予測が示されている。そのため、総則では「特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」と明記され、初めてキャリア教育が学習指導要領の中で言及されることになった。特別活動の項では、現在や将来に希望や目標をもって生きる意欲や態度の形成、社会参画意識の醸成や働くことの意義の理解など、人生そのものを考える教育が求められている。従来のキャリア教育のように職業や就労に偏重することなく、生涯学び続ける姿勢や社会構造、雇用環境の変化にも柔軟に対応できる能力を育む新たなキャリア教育観を柱とした学校づくりが必要とされている。

２　研究の目的

本研究は、キャリア教育を「人生そのものを考える教育」と捉え、各学校ですでに行われている取り組みや活動を発展させることで、新たなキャリア教育観を柱とした学校づくりを推進していくための具体的な提案をすることを目的とする。

３　キャリア教育について

(１)キャリア教育の定義

中央教育審議会答申(2011)において、キャリア教育は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」として定義づけられた。キャリア発達とは「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現し

ていく過程」である。「一定または特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる教育」と定義した職業教育との位置付けを明確にしている。

（2）基礎的・汎用的能力

以前、キャリア発達に関わる能力として用いられてきた「４領域８能力」には様々な課題が見られたため、その後に提唱された類似性の高い各種の能力論とともに改めて分析を加え、「分野や職種にかかわらず、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力」として再構成したものが「基礎的・汎用的能力」である。これは「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」の四つの能力によって構成される(表 1)。この四つの能力は、それぞれが独立したものではなく、相互に関連・依存した関係にあり、特に順序があるものではなく、またこれらの能力をすべてのものが同じ程度あるいは均一に身に付けることを求めるものではない。 また、これらの能力をどのようなまとまりで、どの程度身に付けさせるのかは、学校や地域の特色、専攻分野の特性や子ども・若者の発達の段階によって異なると考えられるため、各学校においては、この四つの能力を参考にしつつ、それぞれの課題を踏まえて具体の能力を設定し、工夫された教育を通じて達成するよう注意を促している。基礎的・汎用的能力は、学校から社会への意向を円滑に行うための中核となる能力と言える。そしてすぐに身につくものではなく、教育活動全体を通して組織的・体系的に育成していくものと考えられている。

表 1　基礎的・汎用的能力

基礎的・汎用的能力	**人間関係形成・社会形成能力** 他者の個性を理解する力、他者に働きかける力、コミュニケーション・スキル、チームワーク、リーダーシップ等
	自己理解・自己管理能力 自己の役割の理解、前向きに考える力、動機付け、忍耐力、ストレス・マネジメント、主体的行動等
	課題対応能力 情報の理解・選択・処理、本質の理解、原因の追究、課題発見、計画立案・実行力、評価・改善等
	キャリアプランニング能力 学ぶこと・働くことの意義や役割の理解、多様性の理解、将来設計、選択、行動・改善等

４　キャリア教育の視覚化

（1）キャリア教育に対する誤解

キャリア教育の推進が叫ばれてはいるが、教員の多忙化が深刻な社会問題となっている中、さらに負担が増えるのではないかとの懸念の声が聞かれている。しかし、これは誤解から生じた懸念である可能性がある。「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」(2002)において、「新しい教育活動を指すものではない」としている。今すでに行っている活動を振り返り、活用することでキャリア教育を推進していこうという趣旨である。この視点から教育活動を振り返ると、今まで行ってきた様々な活動にキャリア教育の断片があることに気づく。教育活動の全てがキャリア教育で育てたい能力につながっており、目指す子供像へ向かっていくイメージを学校全体で共有し、実践していくことが重要である。

（2）二つのキャリア形成

キャリア形成には、大きく２種類あると考えられる。子供たちのキャリアが形成されていく過程において、計画的に段階を追って形成されていくケースと、偶発的な出会いや体験から形成

されていくケースである。これらをそれぞれ「計画型キャリア形成」と「偶然型キャリア形成」と呼びたい。「計画型キャリア形成」では、まず「自己分析」を行い、次に「スキルの棚卸し」を行う。そして「ビジョン設定」をし、最後に「アクションプランの立案」を行い、実行しようとするものであり、より自分にあった職業選択を計画的に促す理論である。「偶然型キャリア形成」はクランボルツ(1999)が提唱する「計画的偶発性理論」(Planned Happenstance)からヒントを得ている。職業生活(人生)は、「偶然」の出来事や出会いなどによって決まっていくことが多い。「偶然」は無意識に発生するものだが、クランポルツは「好奇心」「持続性」「柔軟性」「楽観性」「冒険心」の五つの要素のいずれかが生じたときに起こると述べている。そして「偶然」から意図しなかった「キャリア」が出来上がっているのだという。図１は、計画型キャリア形成と偶然型キャリア形成のプロセスを図式化したものである。

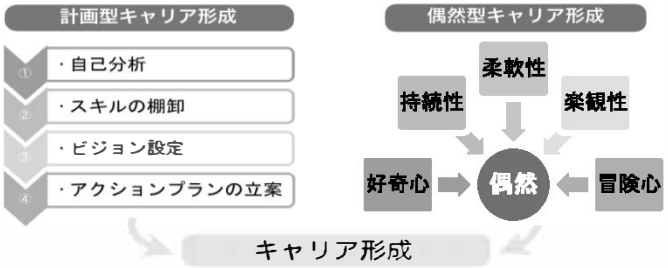

図 1　計画型キャリア形成と偶然型キャリア形成

（3）学校づくりの柱としてのキャリア教育

「偶然」を引き起こす要因を学校生活中で振り返ってみると、意外なほど多くの教育活動が、「偶然」を引き起こすために寄与していることに気づく。無意識のうちに偶然型キャリア形成を行なっていることになる。各教科における学習や、総合的な学習の時間、特別活動で行われている職場体験、進路指導は偶然型キャリア形成の要素が大きいと言える。キャリア教育に求められるのは、二つのキャリア形成を伴いながら、教育活動全体を通して基礎的・汎用的能力の育成を図ることである。学校の役割は、子供が日々の学習を通して夢や目標を達成できるように計画型キャリア形成を支援するとともに、社会に開かれた教育課程のもと、人や地域との関わりを軸に「偶然」を引き起こす機会を多く作り、子供の視野を広げる偶然型キャリア形成の支援も行うことである。図２は、二つのキャリア形成を伴いながら教育活動全体を通して育む基礎的・汎用的能力をイメージしたものである。キャリア教育は学校づくりの柱と成り得るものである。

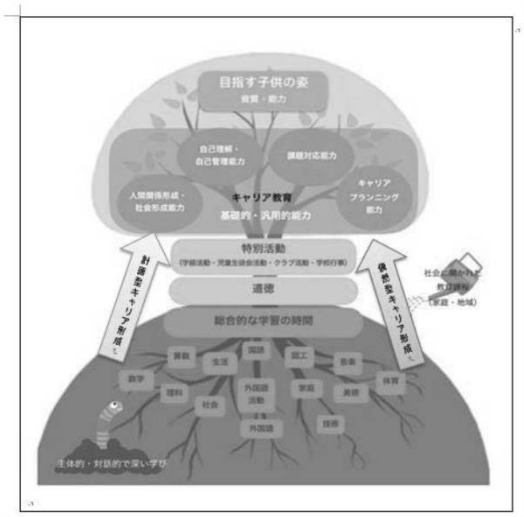

図 2　教育活動全体を通して育む基礎的・汎用的な能力

５　社会に開かれた全体計画

（1）全体計画の課題

キャリア教育は、特定の活動や指導方法に限定されるものではなく、学校教育全体の活動を通じて体系的に行われるものである。そしてキャリア教育を通じて行われる学習活動が体験だけに終わらず、活動や体験を通して得られた気づきを質的に高める指導を十分に行う必要がある。そ

のために視点や目標を明確に定めた全体計画を作成し、学校のみならず、児童生徒や保護者・地域と共有しなければならない。これをもとに各都道府県や市町村の教育委員会では様々な例を挙げているが、これらの書式例には課題が多い。表 2 は、課題を様式上の課題と使用上に課題に分けて表したものである。

表 2　キャリア教育全体計画の課題

様式上の課題
1. 目標がたくさんあること
2. ○○像がたくさんあること
3. 児童生徒、保護者、地域等実態の一般化
4. 基礎的・汎用的能力のぶれ
使用上の課題
1. 作成・実践後、振り返りに利用できていない
2. 主体が学校であること
3. 児童生徒、保護者・地域に広まっていない

（2）社会に開かれた全体計画の提案

（1）で示した課題を克服し、学校だけでなく、児童生徒、保護者・地域の方にもわかりやすく親しみやすいように、イラスト化した全体計画を提案したい(図 3)。まず様式上の課題 1 と 2 については、県や市町村、または学校の目指す子供の姿に一本化し、わかりやすく示せるように、花をイメージした欄に記入できるようにした。これは、資質・能力の根幹となる各教科や総合的な学習、太い幹となる特別活動や道徳を通して行われるキャリア教育によって、目指す子供の姿に近づくことをイメージしたものである。また、総合的な学習や道徳、特別活動の欄には、学校独自の体験活動等を記すことで、児童生徒や保護者・地域の方が見通しを持てるようにした。課題 3 については、児童生徒、保護者、地域等の実態や願いを一般化するのではなく、逆に児童生徒自身に自分の強みや克服したいことを記述できるようにした。内容については、自分の強みを「長所や得意なこと」、克服したいことを「伸ばしたい力」というように、児童生徒にもわかりやすい表現にした。保護者・地域の欄には、子どもに対する願い(つけてほしい力等)を記述できるようにした。課題 4 については、基礎的・汎用的能力の例を箇条書きしたものを記載したが、学校独自の言葉に置き換えてもよい。ただし、本来の意味が変わらないようすることと、箇条書きにこだわる必要なないが、できるだけ短く端的に意味が理解できる表現にすることを意識したい。

次に使用上の課題 1 については、児童生徒自身が記述する欄を設けた。これを記述しただけで終わるのではなく学期末の面談時等に使用することで、今学期を振り返ったり、次の学期の目標を立てたりすることに役立たせることができる。また、教員自身も面談等で使用することで、目指す子供の姿に近づけるような支援ができているかどうかを確認することができる。これはキャリア・カウンセリングにもつながる。学期ごとに作成したものをポートフォリオにし、それを小学校から中学校まで継続すれば、キャリアパスポートとしての役割も果たすことができる。課題 2 についても、児童生徒自身が記述する欄を設けたり、保護者・地域の方の記述欄を設けたりすることで、それぞれが主体的にキャリア教育に取り組むことを意識できるようになる。これによって、課題 3 も自ずと解消することができる。学校、児童生徒、保護者・

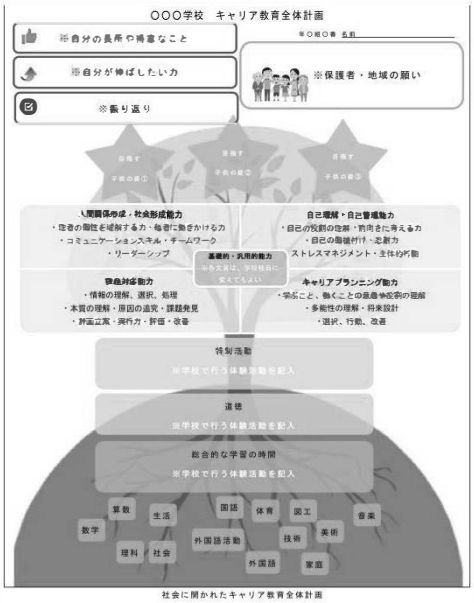

図 3　キャリア教育全体計画

地域で作る全体計画は、社会に開かれた教育課程の実践の一助になると期待される。

６　子ども自身で基礎的・汎用的能力を培う自己評価表

キャリア教育で期待されるものの一つに、未来に必要な力を身につけていることを実感させることによる学習意欲の向上がある。ではどのように実感させていけばよいのだろうか。その手立てとして、多くの教科で利用されている学習振り返りシートのリノベーションを提案する(図 4)。

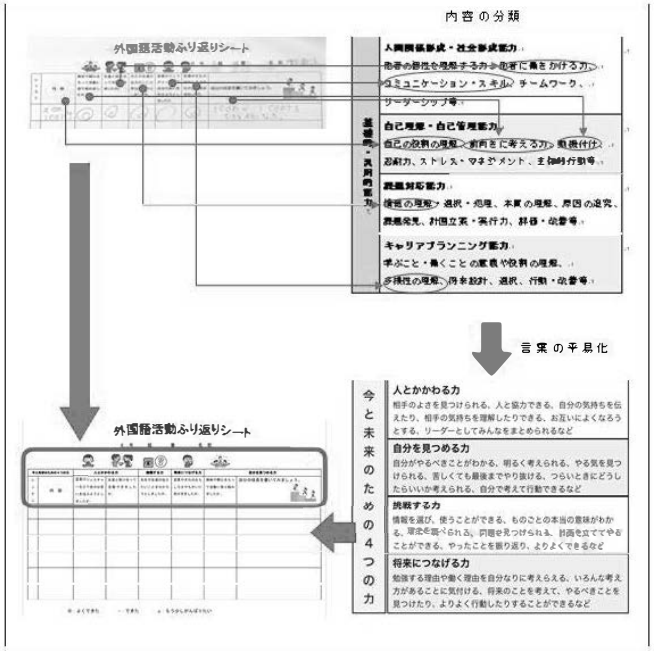

図 4　A 市立 B 小学校 6 年生の外国語活動振り返りシートの活用

A 市立 B 小学校 6 年生の外国語活動の振り返しシートを分析したい。学習した「内容」を自ら書く欄があるが、これにより何を学んだかを認知することができる。それは自己理解・自己管理能力にあたる。自己評価項目の「興味や関心をもって活動に取り組みましたか」や「自分の成長を書いてみましょう」も自己理解・自己管理能力にあたる。「友達と助け合って活動できましたか」や「言葉やジェスチャーなどで自分の思いを伝えようとしましたか」は人間関係形成・社会形成能力、「先生や友達の伝えたいことを分かろうとしましたか」は課題対応能力、「言葉や文化のおもしろさや違いに気づきましたか」はキャリアプランニング能力にあたり、四つの基礎的・汎用的能力を網羅していることがわかる。今使っているシートを活用し、授業開きや単元の始めに「こういう力をつけよう」等の声かけが子供たちへのキャリア形成の意識づけを促すきっかけになると考える。以上を踏まえ、子供自身が基礎的・汎用的能力を意識できるように元の自己評価表を再構成した。まず、基礎的・汎用的能力を一覧にした表の文言を子供にとってわかりやすい表現に置き換えた。次に、元の自己評価表の各項目を基礎的・汎用的能力ごとに並べ替えた。このような自己評価表は、子供への意識付けのみならず、教員に対しても、キャリア教育を意識した授業改善につながる有効な手立てとなる。

７　キャリア・カウンセリングによる授業改善

キャリア・カウンセリングとは、特別な時間を設定して行う面談だけではなく、教員と児童・生徒との直接の言語的なコミュニケーションを手段とする、日常的に行われる子供一人一人との「対話」そのもののことである。「今、すべきこと」に積極的に取り組めるように支援する対話がキャリア・カウンセリングの特徴である。キャリア・カウンセリングの最大のメリットとして、タイミングを逸しない（キャリア教育の）実践が可能であることをあげられる。教室や校庭、廊下など、日常の教育活動が生起するあらゆる場所で行うことができる。では、どのような対話がキャリア・カウンセリングなのだろうか。普段の会話との相違点や注意点に着目し、授業改善の

推進につながるキャリア・カウンセリング力を身に付けるために、校内研修によるケーススタディを提案する。

「変わる！キャリア教育」(2016)において、キャリア・カウンセリングを行う際の具体的な手立てとして、教員が「語る」、子供に「語らせる」、子供たちに「語り合わせる」の 3 点をあげている。教員が「語る」ことは、子供たちにとって自分の生き方を考える上で重要であるため、子供たちが自分の思いや考えを意識するように問いかけることが肝要であると記されている。しかし、それが教員や大人の思いを押し付けたり、指示的に話したりすることに繋がってはいけないと注意を促している。子供に「語らせる」ことは、まだ言葉や文章にしていない自分の思いや考えに気付くきっかけとなるため、子供たちの思いや考えを引き出し、受け止めながら聞くことが重要であるとし、表面的な話をさせるだけに終わることがないようにしなければならないとしている。子供たちに「語り合わせる」ことは、他者の思いや考え方を知るとともに、自分自身の思いや考え方を明確にしたり、整理・再構築したりすることにつながるとし、話し合いをさせる前後に気付きを促すことで、話し合いをより深める手がかりを示すことが大切であるとしている。何のきっかけも与えずただ話し合いをさせるのは対話とは言えないことを示唆している。

以上を踏まえた上で、校内研修等で事例を上げながらロールプレイをしたり、適切な対話を考えたりすることで、キャリア・カウンセリングによる授業改善が効果的に推進されると考える。表 3 はその事例である。こうした事例は、教育活動では日常的に起こりうるものである。今まで看過してきた事例でも、キャリア・カウンセリングの視点をもつことで個々の課題を認識でき、個に応じた支援につなげることが期待できる。

表 3　キャリア・カウンセリング力を育むための事例

事例 1	事例 2
A さんは宿題を忘れました。Z 教諭は A さんを厳しく叱責し、罰として宿題を 2 倍やらせました。 課題 1. A さんはどんな気持ちか考えてみましょう。 課題 2. A さんが主体的に宿題に取り組めるように支援する「対話」を考えてみましょう。	Y 教諭は立志式（中学 2 年生）で生徒たちに夢を語らせることにしました。B さんは英語の教員になりたいと言いましたが、実はそれはウソでした。 課題 1. B さんがなぜウソをついたか考えてみましょう。 課題 2. どのような「対話」による支援ができるか考えてみましょう。

8　本研究のまとめ

本研究では、キャリア教育を「人生そのものを考える教育」と捉え、基礎的・汎用的能力の育成や社会とのかかわりの中で、豊かなキャリア形成を促す提案を行ってきた。その要素は二つに集約できる。一つ目は、体験活動や探究活動を基盤とした学習を通じ、偶然に出会う人や物、場から学ぶ機会を可能な限り教育課程に取り入れることである。二つ目に、基礎的・汎用的能力の育成という視点で個々の子供に向き合い、画一・一斉指導から「自己決定できる力を養おうとする個別支援」への転換の図ることである。この二つを根底に据えたキャリア教育が、「人生 100 年時代」に生きる子供たちの幸福につながることを願う。

・本田由紀(2016.6)「教育と職業との関係をどうつなぐか－垂直的／水平的多様性の観点から」『社会のなかの教育（岩波講座 教育 変革への展望 第 2 巻）』岩波書店 169-197